

# 放送人の会

No・48  
2010・11.15

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階

Tel&fax 03-3221-0019 E-mail info@hosojin.com

代表幹事 今野勉 編集担当 伊藤雅浩(会報編集長)、鈴木典之、松尾羊一 事務局 佐藤真美子

## 第10回大会を終えて

日本組織委員 山田尚

今回の中国・蘇州大会に参加、またご協力をいただきました皆様、ありがとうございます。主催の中国の関係者の方もお疲れ様でした。

今大会は、参加作品の質も参加者の大会への熱意、意識も、日本が3カ国中最も高かったような気がします。韓中の作品では、韓国の1作品がアクションでも、まったく個人的な感想ですが、いまひとつ刺激を受けたり熱気やパワーを感じる事が少ない印象でした。

そんな中で9年ぶりに再会したという日韓の制作者の抱き合う姿が印象的でした。

ところで、放送人の会が、このフォーラムの日本の窓口(担当)となったのは、正式名称が、「日韓中テレビ制作者フォーラム」となり、中国・揚州で開催された第4回大会からです。

ご存知の通り、2001年に、博多釜山のフェリー上で、九州地区を中心にした日本、及び韓国のテレビドキュメンタリーの制作者有志たちが集い、なぜお互いに歴史認識や、考え方や捉え方が違うのか、意見を戦わせたのが始まりでした。しかし相互の認識の違いを埋めることはできず、議論や作品の検証は、翌年の日本・対馬、その翌年の、韓国・済州島(中国がオブザーバーで参加)での集いへと繋がっていきます。

そこまでは、あくまで日韓の制作者個人間の次元での集まりでしたが、その翌年

の4回目からは日韓に中国が加わることになり、この会の持つ意味、役割、それに規模も一段と拡大します。

そこで、われわれ放送人の会に受け皿としての白羽の矢が立ったのです。現役、OB含め放送番組への熱意と見識は高くNHK、民放、制作プロダクションとも等距離の、個人の集まり、というのは日韓中フォーラムの理念とは合致しているようでした。但し財力や権力、組織力と縁のないことが、苦勞に繋がってきます……。多くの方がご存知でしたでしょうが、これまでの経緯を少し書き記しました。というのも、フォーラムが今回で10回目となり、反省も含め、改めて原点を見つめ直そうと思ったからです。

ここ数回、全体の流れを含め形式にのみとらわれていないでしょうか。全員投票による優秀賞の選定など新たな取り組みも始まりましたが、原点である制作者の活発な意見交換や共通認識はどこまで充実できていたでしょうか。

今回、大会前から、そして大会中にも作品の中で、「国」とも少し関連した部分でトラブルがありました。

日韓中3カ国は、歴史的にも地理的にも文化的にも近く、それ故過去に多くの問題も起きました。そんな国同士だからこそあるのがこの3カ国のテレビ制作者たちのフォーラムなのです。

制作者たちは自分の作った作品への意見も求めます。認識の違いもあれば厳しい批評、批判もあるかもしれません。他者への配慮が必要なこともあります。それらを自由に言い合えるのがテレビ制作者、制作関係者だけというインナーの大会ならではのでしょう。

日韓の時代から10回目の今回まで、日本で3回、韓国で3回、中国で3回開かれ、日韓海上が1回ありました。

ぐるっと一巡したところですか。そういう面でも、来年、札幌を会場に予定している大会は大きな役割を持つことになりそうです。日韓中3カ国の友好、交流という前提の中にメディアとしてのテレビ、テレビ番組の役割と意味を確認できるものに。

## 蘇州大会の記録

大会は10月15日(金)から17日(日)に開かれ、18日(月)に蘇州観光を行ないました。

10回大会を記念して、各国のこれまでの会に貢献した方々を表彰。楊伝光、趙化勇、黎鳴、揚州・天津・蘇州の電視台台長(以上中国)、崔彰鳳、章翰成、崔震溶、李康澤、金煥均、金徳在、放送文化振興会(以上韓国)、大山勝美、河野尚行、山田尚、原田令嗣、志賀信夫、村上雅通、西世賢寿(以上日本)の各氏が表彰されました。

番組はそれぞれを鑑賞討論のあと、投票審査が行なわれ、左記の結果です。

**最優秀賞**：嫁の素晴らしい時代(中国)

**優秀賞**：無縁社会、空飛ぶタイヤ(日本)

**蘇州賞**：その他の作品

各国のテレビ事情報告は左記の通り。

胡知鋒氏「2010年の中国のTV発展状況」、小玉滋彦氏「日本最初の民間有料TV-WOWOWの場合」、張海朗氏「放送構造改編と韓流コンテンツとの間」

# 訪中国の声

疑心捨て 渡れば鬼も 雲霧かな

荻野慶人

10月15日10時25分羽田発上海行の僕たちは、尖閣騒動などすっかり忘れて旅情も快晴だった。南米チリ鉱山地下の33名全員救出という朗報のためだ。

フォーラム会場の蘇州市会議中心と並ぶ中心大酒店へのバス車中で、案内役の朱鳳興さんが「政治問題に関しては遠慮させて頂き」と笑顔で気を配る。「ジャーナリストが政治を避けてどうする！」と首を傾けていると、蘇州は昔から親日で「君がみ胸に抱かれて聞くは」と歌うから吃驚する。慣例で芸術家協会か電視台の広報担当と見て話しかけると「私は旅行社の者でして」と名刺には(〇〇有限公司商旅部部长)とある。中国は商業主義も今や世界第二なんだと納得した。

各国4篇の参加作品は、共通テーマが「私たちの暮らし」のせいで、冒険的な迫りに乏しい。世界規模の不況は日中韓揃えて守りの態勢にするのか。

弱者に吹く風は過酷だ。寒山寺、拙政園、同里古鎮…など観光バスの駐車場で、高齢や身障の物乞いの姿が共產主義体制にそぐわない。一方、身形は質素な勤労者風が洒落たワンピースで髪に赤いリボンの幼女と手をつなぐ。ドキュメンタリー『赤いレース』で観たスパルタ教育の逆アングルだ。一人っ子政策は、学問や体操や芸能で愛児の出世に賭ける悲喜劇

を世相にする。

「10月19日の蘇州市」を記録しようとする動バイクの往来激しい交差点をHDVカメラで狙っていると、罵声の応酬が耳に飛び込む。一方が「XWZスミダ！」と叫ぶから隣国人だ。警官が中に入ったが、連行する気配はないのでホッとす。しかし、カメラを向けるのは思い止まった。\*\*\*\*\*蘇州の路地裏と上海郊外\*\*\*\*\*

河野尚行

国際的な番組審査の席上笑いが起こることは珍しい。『ケンミンショウ』は韓国人にも中国人にも受けた。が、韓国はともかく、中国ではこういう番組は、ここ当分登場しないであろう。23省内に56もの民族を抱える中国では、言葉も風習も生活文化も違つてあたり前だからだ。

ただ、今のような経済成長があつたと10年も続くと、一つの省内でのバラエティとして登場するかも知れない。その時はガッポリ「番組特許料」を頂きたいものだ。それより『無縁社会』の登場の方が早いかも知れない。番組制作スタッフの説明していたようにその原因には様々な問題、側面が考えられるが、市場原理の貫徹、資本の論理が導き出す近代社会の構図が背景にあることは間違いない。高速バスで30分走つても、延々と切れ目なく続く真新しいマンション群、あの異様な上海郊外の明るさの中に、やがて闇が忍び寄るのではないか。中国5千年の人間の絆を断ち切る得体の知れないものが寄りつかないかと不安になった。その朝、蘇州の街の古びた小路から覗いた老人たちの優雅な姿がちらついた。辻の瓦

が崩れ、ひびが入った白壁に囲まれた中庭で、小鳥の鳴き声をめながら、なにやら笑顔でゆったり語り合う年寄りのグループ。その姿が百年も2百年も昔の光景に感じられてしまった。

一人っ子政策と高齢化社会の到来と高層マンションの密集。中国人民共和国は忍び寄る「無縁社会」をどう防ぐのであろうか。GNP世界第2位になった中国、急激にグローバル化して国連を含めリーダーを輩出している韓国。日・韓中の3国の間で不都合な事態が起きるのはあたり前、放送人同士でも意見が衝突してもあたり前、お互いの番組を視聴できる共通の場が確保できればそれでよい。優れた番組は国を超え、何時までも人の心に刻み込まれ、本人が意識する以上に影響力を持ち続けるのだ。若い創作能力が高い人ほどその影響は大きい。体制が違う3国で、このフォーラムを続ける意義はそこにある。

\*\*\*\*\*やる気がわいてきました\*\*\*\*\*

NHK・PD 蔵端美幸

蘇州から戻つてきて、まだ24時間しかたつていないというのにすっかり日常の忙しさのなかにいる。4日間はあつという間だったが、私にとつては本当に貴重な機会となった。韓国の若いディレクターたちとの交流、日本の先輩方との出会い。自分がこれまでいかに狭い組織のなかで「社会」を見ているつもりになっていたか、思い知らされた。

特に韓国のドキュメンタリーには、荒削りだけれど挑戦的な作品が多く「伝えたい！」というパワーに圧倒された。中

国の作品からは、今のあの国の体制下でドキュメンタリーを撮ることの難しさを感じた。それは逆に、表現の自由や知る権利が保障されている私たちが何をすべきか、本当に役割を果たしているのか、自らを問ひ直すことにもつながつた。

私たちの出品作品「NHKスペシャル 無縁社会〜無縁死3万2千人の衝撃〜」の放映後、韓国のディレクターからかけられた言葉は忘れられない。「世の中で起きている現象を「無縁社会」と名づけて概念化し、社会に問題提起したのが、この番組の最も大きな成果だ。それこそがマスメディアに求められている仕事だと思ふし、自分たちも同じことを目指していきたい」。負けられない、負けたくないと思つた。

フォーラムで様々な作品を見、議論するうちに、なんだかどんどん楽しくなつてやる気がむくむくわいてきた。羽田から会社に到着してすぐ、すれ違った同僚に「すごく元気そうじゃない？」と言われたので、間違いない。この気持ちが薄れないうちにいい仕事をしよう。

\*\*\*\*\*優秀賞受賞ありがとうございます\*\*\*\*\*

WOWOW 編成制作局 小玉滋彦

初めて参加させていただきましたが、今回は日本にWOWOWというペイテレビ放送局があるのを知っていただけの最大の目的でした。弊社連続ドラマ「空飛ぶタイヤ」を上映後「日本最初の民間有料放送局WOWOWの場合」というスピーチをさせていただきました。講演後は、中国、韓国のみならず日本のテレビ関係者からも「WOWOWという会社

がよくわかった！すばらしい！」とか「WOWOWのドラマが従来の壁を突き破って制作していることに感謝している制作者は多いんですよ」など意外にも温かい言葉をたくさん頂き、感激いたしました。投票の結果、「空飛ぶタイヤ」が「第10回日韓中テレビ制作者フォーラム大賞 優秀賞」に選ばれました。重ねて厚く御礼申し上げます。

日本のテレビは半世紀以上に渡り、公共放送のNHKと広告放送の民放との二元体制で発展してきました。今衛星放送で100chを超える多くの有料放送事業者が存在する中、WOWOWを含む「多チャンネル・有料放送」が確固たる地位を築くことこそが放送界を元気にさせることだと確信しています。今回の貴重な経験をきっかけに、中国、韓国、そして日本の放送局の皆様と共同制作をはじめ様々な局面で御一緒させていただくことを強く願っております。

このフォーラムを10年にわたり支えていらつしやる事務局の皆様は心より敬意を表します。素晴らしい異文化体験をさせていただきました。この度はお世話になり、本当にありがとうございました。

### 20年先を目指して手を繋ごう

寒河江正

日韓中テレビ制作者フォーラムは今年で10年を迎えた。

初めての開催は日本・韓国両国参加の船上での激しい歴史認識の違いの議論から始まったと聞く。

この火、表彰台に立ち、賞状、記念品を受ける各国受賞者の皆さんの表情には

10年の時が刻まれていた。思い出が走馬燈のように蘇っていた人も多くおられたのではないかと思った。

私は全日程、10月15日、16日、17日、18日、19日の5日間の内、17日の午前中で会場を後にした。全員の投票の結果は知らない。私の採点は以下の通りだ。

1位 「無縁社会」無縁死3万2千人の

2位 空飛ぶタイヤ (日本)

3位 春草 (中国)

4位 田舎のコンビニ (日本)

5位 おばさんたち、彼に惚れた (韓国)

以下、特別賞は「ケンミンSHOW」(日本)「嫁の素晴らしい時代」(中国)「ゴキブリソナタ」(韓国)

〈感想〉

1位 非正規社員の実態を取材した記者が「身元不明の遺体」や「親族の引き取りのない遺体」を官報では「行旅死亡」として記載されていることを知り、追跡調査。1776の全国自治体を独自に調査し、実態をつかんだ。追跡調査の重要性をあらためて感じさせられた。

2位 公共放送は視聴者の受信料。民間放送は広告主の支援。ペイテレビは視聴者が見たい番組を放送する局にお金を払う。そのペイテレビのWOWOWは今年で20年を迎え、独自の制作ドラマを公開した。社会性の強い内容を韓国・中国の制作者はどんな思い出で鑑賞したのだろうか。

3位 日本のテレビドラマ「おしん」が作品のベースになっていますと制作者は語っていた。主演、姑を演じた両女優ともに個性的でドラマに気品が感じられた。貧しい家庭に育った「春草」、どんな辛い

ことにも屈しない。その微笑が印象的だった。

以下紙数が尽きて割愛するが、表題に掲げたように、この会のより一層の発展を望みたい。メディアの役割の重要性は益々大きくなる。

「2001年は北海道ですね」と語った中国の制作者と堅い握手をして別れた。

\*\*\*\*\*  
フォーラム蘇州大会に参加して

NPO法人日中人材技術交流協会

下崎 寛

日本と中国の企業、留学生の交流支援をしている協会です。初めて日韓中テレビ制作者フォーラムに参加しました。

そこで、特に感じたことは、テレビ番組の技術的なことは、素人ですのだからありませんが、あるテーマにもとづき日韓中のテレビ番組交流を通して、日韓中の文化・慣習の違いがはつきりと見えることです。

番組を単に見るだけでは、見えてこない文化・慣習の違いが、ドキュメンタリー等のテーマを絞ってテレビ番組を比較することにより、日韓中の慣習の考え方、市民の悩み、親子等の家庭の悩み等が3次元の構図により検討ができることに感じました。

今回は、時間がなく、テレビ番組を通じて、日韓中の文化・慣習の違いをシンポジウムにより深く議論することができなかったことは残念に思います。

次回以降は、シンポジウムの時間を十分に取っていただき、日韓中のテレビ番組技術・文化の違いについて討論をして

いただきたいと思えます。

また、私どもの協会は、日韓中の生活、ビジネスマナーについても研究しています。その貴重な材料として勉強になりました。

テーマを絞り、日韓中がテレビ番組を提供し、テレビづくりの在り方、日韓中の文化、慣習の違いを明らかにすることによって、お互いの文化交流を図れることの意義は高いと思われれます。今後とも継続を期待します。

\*\*\*\*\*

刺激的な日本出品作

鈴木典之

出品作をみる限り、共に厳しい言論統制下、中国は政治・社会批判を避けて巧みに民衆の表現分野を拓いて活気があるが、韓国は明らかに萎縮し勢いが殺がれていました。中で、日本は異彩を放って、注目も浴びました。

ドラマの「空飛ぶタイヤ」(WOWOW)は欠陥自動車のリコール問題、ドキュメンタリーの「無縁社会」(NHK)は家族崩壊と高齢化の必然的帰結、「田舎のコンビニ」(テレビ金沢)は地方の過疎化の行方。河野・日本代表の率直明快な講評を借りれば、「3ヶ国共通の現実問題への警鐘のつもりで、日本は敢えて自国の恥の部分を示した」ことになりました。

中韓の反応は質問の多さに表われ、表向きは意見は控えたものの、本音を刺激された手応えが見て取れました。

個人的な接触で、韓国のリーダーの一人金さんは「方法論や技術では接近していると思うが、テーマの自由さで落差が大きい」と漏らし、中国・蘇州テレビの王

主任は「とてもとても参考になった」と握手に力を込めました。

読売テレビのバラエティー「秘密のケンミンショー」は会場の笑いを誘いましたが、逆に国情の違いを強く感じさせました。韓国では地域毎の対抗意識が強く「とてもこうはいかない」し、中国は広すぎて他地域との比較は「ピンと来ない」とのこと、「企画は難しい」（宋さん、干さん）という反応でした。

出品作選びに関わり、密かに期待していた中韓の制作者の心の内も取材できて、個人的には収穫がありました。

\*\*\*\*\*  
「ゴキブリ」事件

NHK福岡・報道局番組部 高山 仁

今回のフォーラムは、公式イベント後に韓国制作陣と蘇州の街に繰り出し、夜中まで呑みながら語り合うなど、すばらしい人脈と大きな刺激をもらった4日間であった。

期間中、大変興味深い事件があった。韓国EBSが制作した「ゴキブリ」。この作品が事前に韓国側や制作者の了解も得ず改編されていたという。韓国側は上映後、抗議をし、その後の試写をボイコットするという事態になった。勿論日本側はこのことを知らなかったが、テレビ金沢の作品の上映中だったため、失礼だなあという程度に思っていた。

しかし、夕方に韓国側のディレクターから詳しい事情を聞くと、中国共産党宣伝部が作品中のゴキブリ出沒の舞台がソウル市にある「中華料理店」という点を問題視し、上映にあたって制作者に相談

もせず、その箇所をカットしたのだという。我々の常識からは考えられないことだが、マスコミ全体が共産党の指導下にある中国では、未だにこのようなことが、まかり通っているのである。

そもそもこのフォーラムは、異なる歴史観を持つ隣国同士が、お互いの文化を知り合うため、膝をつき合わせて番組を語り合うことから始まったと伺った。中国側の過度な演出、国家の威信を賭けたような番組コンペ主義には、今一度くさびを打つべきではと痛切に感じた出来事だった。

\*\*\*\*\*  
刺激・刺激・感動

テレビ金沢報道制作局報道部 辻本昌平

初めての参加でしたが、周りを見渡すと著名な演出家や制作者の大物ぞろい。また出品作も東京で全国放送している大作ばかり。ローカル局参加は、私どもテレビ金沢だけで、よく日本代表作に選んでいただけと恐縮しました。

フォーラムでの上映会は刺激的で、普段あまり見る機会がない韓国や中国のドキュメンタリーやドラマを拝見し、制作者の方の言葉も聞け、大いに勉強になりました。

その中でもWOWOWの「空飛ぶタイヤ」は、演出、脚本、俳優の演技などどれをとっても感心することばかりでした。小玉さんのTV事情報告では、自社制作にこだわる熱い思いを聞き、採算度外視で、あのような難しい社会的なテーマを扱われ、それがまた、成功し自社のブランド力を高め、WOWOWドラマを軌道

に乗せられた話は、私たちローカル局の制作者には、とても興味深く、その思いに感動しました。

そして、もう一つの刺激は、夜にオーブンする松尾 bar です。

連日満員で、熱い議論が交わされていました。個人的な論客ぞろいで、激論になると、どなたかが仲裁に入り、しばらくするとまた熱くなる・・・「朝まで生テレビ」のようで楽しかったです。

私たち制作者には、大変勉強になることばかり、放送界を担ってこられた大先輩の方々から、多くのことを学びました。

このような機会を与えてくださって感謝です。運営には、さまざまなお苦勞をされていることも知りました。

頭が下がるばかりです。テレビ界の発展のためにも、どうかこの3国の交流が末永く続くよう、お願い申し上げます

\*\*\*\*\*  
昼・夜 至福のとき

テレビ金沢報道制作局 中崎清栄

今回「田舎のコンピニ」を参加作品に加えて頂いたのが、中国や韓国の仲間と同席できたのですが、今まで何気なく聞き流していた「日韓中」の言葉が帰国後、重く意味を持つようになりました。

というのも上映をめぐり、国の有り様が見えたからです。

10年もの間、3ヶ国の国情をかわしながらテレビ制作者フォーラムを継続してきた放送人の会。今年のテーマ番組にNHKの「無縁社会」と私どもの「田舎のコンピニ」を選択なさった背景には、中韓制作者へのメッセージが込められていました。

「言いたいことが言えない国の事情は分かるが頑張っ！」です。

日本が抱える問題はいずれ中国にも韓国にも確実に起こります。政治色を出さずに番組を作るしかない仲間達に祈りをこめて選択した2番組だったのです。

放送を愛する会が、大人の配慮で続けてきた国際交流でした。

さて、夜になると松尾さんの部屋でバーが開店します。シングルルームに入れ替わり立ち代り10人以上が出入りして常に満席、放送話が盛り上がりです。

時には意見が違い「あわや！」という場面もスルリと笑いに変えるのは熟年の知恵でしょうか？言いたい放題、自由気ままに続く話は、私には素敵な宝物でした。

もう一つ、夜な夜なお勤めをこなす松尾さんの昼を報告します。睡魔との付き合い方は年が入った優れ技、さりげなさに感心しました。

昼も夜も至福の時、本当に楽しい時間でした。

さて「田舎のコンピニ」ですが、11月5日名古屋で開催された民間放送連盟全国大会で、日本放送文化大賞準グランプリを頂くことができました。6年前に新設された賞は3ヶ月以内の全国放送と準グランプリ・500万円（グランプリは1千万円）の報奨金付きで経営者、制作者に実のある賞です。

ステージには地区を勝ち抜いた7人の制作者が光り輝く壇上に並び発表を待ちます。

2人にしか褒美が出ないため、辻本さんも緊張で顔を引きつらせ大きくフーと息を吐いています。

# 蘇州大会 アルバム

第1日・15日(金)  
開会式・経過報告・挨拶・功労者表彰



経過報告する鄭氏



開会の辞・趙化勇氏



司会・王鋒氏



挨拶・崔彰鳳氏



挨拶・河野尚行氏



蘇州の歴史紹介



歓迎の辞・瞿長林氏



歓迎の辞・黎鳴氏



歓迎晚餐



金煥均氏



章翰成氏

功労賞受賞者



西世賢寿氏



原田令嗣氏



村上雅通氏



山田尚氏



李昌燮氏



札幌からのメッセージ

各国TV事情報告

林健嗣氏

北見幸一氏

小玉滋彦氏

張海朗氏

胡智鋒氏





高山仁氏

蔵端美幸氏



王麗萍氏



司会



歓送晩餐会 桌上的箱は銘酒「同里紅」



乾杯!



琵琶と低音の胡弓との合奏



昆劇（蘇州に近い昆山の劇）の女優



昆劇の男優

# 蘇州観光



寒山寺の塀の前で記念撮影。中国人もやっている



この拙政園の樹木は15メートル以上



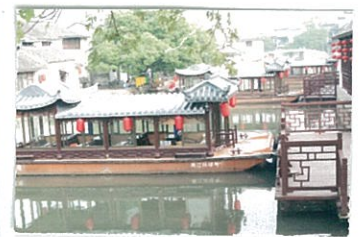
寒山寺・張継の詩の石碑



拙政園の応接間で文人の雰囲気味わう



寒山寺の中。観光客でいっぱい。俗化して日本のようだ



水郷・同里の川に浮かぶ屋形船



拙政園の中は菊の花盛りである



同里の銘酒「同里紅」の酒蔵で50度の酒を試飲。強い！



市内のバス停・古風な屋根に注目



蘇州市メイン通りの舗道・みんな電動バイク



車は右側通行、普通車とバイクの道は区分されている



街頭のマガジスタンド・実にカラフル



とても長い間を置き高らかに「準グランプリ！テレビ金沢」に会場が「オー」とざわめく。

「グランプリではなかった…でも500万円ももらえるし、全国ネットも叶う。これで会社に帰れる」と胸を撫でて安堵。

会社に戻ると「我が事のように嬉しかった！」の笑顔が待っていた。「もし取れなかったら…？」を吹き消し「ありがと」を繰り返す。環境を変えてくれる賞。また作れそうな気配です。

\*\*\*\*\*  
蘇州大会あれこれ  
\*\*\*\*\*

長沼士朗

日本と韓国の参加者それぞれ33名、中国50名、今年の日韓中テレビ制作者フォーラムも、100名を越えるテレビ制作関係者が一同に会する盛大な大会となった。

日本の事務局の裏方の一人として多少気疲れもあったが、大過なく第10回の節目の大会が終り、来年の札幌大会につながる事ができたのは、今大へん良かったと思っている。

以下、このフォーラムで感じたことを思いつくままいくつか記してみたい。

まず参加作品については、これはある意味で当然の事かも知れないが、日本の4作品も含めて見ごたえのある作品が多く、改めてテレビの存在感に思いをめぐらすことができた。

そのなかで特に、グランプリを受賞した中国のドラマ、「嫁の素晴らしい時代」のプレゼンターを務めた、この作品の脚本家でもある王さん（女性）の話が強く心に残った。

作品は、一人の女性が新しい家族や近隣社会との交わりの中で成長していく姿を見つめる、長篇シリーズの第1作目で、主人公が将来の夫と知り合う過程が、ユーモラスなエピソードを交えて、暖かいタッチで描かれていた。

王さんは、自分のシナリオは真実、善良、美しさを目標としており、これからも楽しく美しい作品を書いていきたいという発言が、爽やかな印象を与えた。

次に私には、このフォーラムで嬉しいことが二つあった。

ひとつは、2007年の天津大会で、「PD手帳」という番組について発表した韓国MBCの宋日準さんが、今回も参加していたことである。

2007年の発表では、この社会発表番組にける担当者の熱気に、一種羨望のようなものを感じたが、その後この番組は韓国政府により放送を中止させられ、現在宋さんから4人の担当者は、政府の名誉を傷つけたとして裁判にかけられている。第1審は無罪であったが、この11月に第2審の判決が出されるという。

私は日韓中フォーラムが、こうした宋さんのような制作者を抱え込んでいることに何か誇らしいものを感じるが、別れざわ、来年の札幌大会にもぜひ参加して下さいとエールを送った。

それからもうひとつは、大会を終わって帰国したあと、「無縁社会」の担当者、NHKの高山仁君から、次のようなメールが届いたことである。

「フォーラム内およびその後の飲み会などで、韓国、中国の制作者と語り合う時間をもてたことは、今後の番組作りのうえで大きな刺激になりました。」

昨年の仁川大会では、やはりNHKの遠藤理史君が「これはまさしくPDの合宿だ」とうまい表現を使ったが、そうした雰囲気は、これからもこのフォーラムを支える重要な要素だと思っている。

この他今回は、参加作品をめぐって韓国と中国の間に摩擦が生じ、大会の運営にも多少の混乱を招いたが、この問題は、次の札幌大会の準備を進める中で、3国の腹を割った話し合いにより克服されることを期待したい。

最後にその札幌大会に関連して一言、蘇州大会では放送人の会の有志が、一日の日程が終わると、松尾羊一さんの部屋にお酒とつまみを持ち寄り、連日そこでは、日中問題やメディア論について熱い議論が交わされた。

言葉の問題があり決して容易なことではないと思うが、札幌大会ではこの松尾羊一のような集まりを、3国の参加者が集まれる場所として実現させることはできないだろうか、これは充分検討に値する課題のように私には思われる。

\*\*\*\*\*  
羽田国際線と韓流  
\*\*\*\*\*

牧の瀬恵子

10月23日。その日私は、中国で行われた第10回日中韓テレビ制作者フォーラムから帰国し羽田空港に降り立った。するとそこは出国時の古い国際線ターミナルではなく、新しくオープンしたターミナルだった。そして、入国審査を終え外に出ると、カメラを構えた大勢の人々がフロアーを埋め尽くしていた。聞くと人々は到着する韓流スターを待っているという。

思えば、羽田の国際線の発展と過熱する韓流スター人気は、テレビ制作者フォーラムの歩みと重なる。私が初めてフォーラムに参加したのは7年前。この頃はまだ日本に「韓流」が起きるとは夢にも思わなかった。しかしその年、「冬のソナタ」が日本で放送され、日韓交流は進展。その後も、フォーラムが回を重ねると同じくして韓流は勢いを増し、韓国文化に興味を持った日本人が韓国に押しよせ、一方で、韓国でも日本のドラマや音楽が「ニッポンフィーバー」をもたらした。人々の往来は羽田国際線の発着便を増やし、当然の私もフォーラムで韓国にはまり、日韓を行き来した。

国際線ターミナルが生まれ変わるほどの社会の変化。これにフォーラムがどれだけ影響したかを測るのは難しい。しかし、文化・社会を映し出すテレビが韓流を加速させたことは確かだ。そしてその陰に、フォーラムで東アジアの友人と出会い、番組を通じて交流のために努力した参加者の働きがあったことは確かだ。テレビ制作者フォーラムが始まって10年。今後はその実績を、変わりゆく東アジアの社会の中で目に見える形で提示し、新しい役割を担う事が大切なのかなと思う。

\*\*\*\*\*  
蘇州旅游景点抄  
\*\*\*\*\*

松尾羊一

芥川龍之介は大正10年3月から4ヶ月間、中国内陸を遊んでいる。『江南遊記』によれば、「寒山寺は日本人には馴染みの深い寺だ。だれでも江南へ遊んだものは、必ず寒山寺へ見物に出掛ける。唐詩選を知らない連中でも張継

の詩だけは知っている。何でも程徳全

(注・清朝末期の江蘇省知事)が重修(復元)したのも一つには日本人の参詣が多いから、日本に敬意を表す為、一肌脱いだのだということだ。すると寒山寺を俗悪にしたのは、日本人にも責はあるかも知れない」と言つて重修への不快感を記している。蘇州市街は幾多の戦乱で消滅、その度に仏閣庭園の復元を重ねて今日ある姿になったが、文人はまがいもの性に気づいては嘆き、指弾するのである。それでも運河のほとりに立つと和漢文調で、「橋名を知らず、石橋に依りつつ河水を見る。日光。微風。水色鴨頭の緑に似たり。兩岸粉壁、水上の影描けるが如し。橋下を過ぐるの舟、まず赤塗りの船首見え、次に竹を編みし船艚見ゆ(中略)。桂花一枝流れ来るあり。春愁水色と共に深からんとす」と、感動を手帳に記している。

旅はさらに洛陽へ。龍之介、一句。

表ほこりかかる童子の眠りかな

「蘇州フォーラム」だが、龍之介流に言えば「重修」が目立つ予定調和な作品もあれば、睡魔の間隙を縫い鋭い視座をみなぎらせた個性も点在し、ハツとしたり。望見する運河への思いにも似て大いに楽しんだ。呵呵。

フリートークの活性化を

渡辺紘史

フォーラムへは3回目、今回は組織委員としての参加であった。日中間とつて微妙な時期の開催であったが、最終日、安全に配慮しての措置なのか、上海視察の中止があっただけで、フォーラム自体

に影響することはなかった。

今年のテーマは「暮らし」。暮らしが、ヒトの幸せを求める営みであるとすれば、今回の出品作品には、日・中・韓国に存在する時代進化のズレがあからさまに表現され、興味深いものがあつた。

中国は個人が、幸せを求める必死な姿を描き、韓国は幸せが変質する様を追ひ、日本は幸せを失う社会を映し出した。

一人つ子政策の中で、子供に幸せを託す親と託された子供を描く、「赤いレーズ」小人国は子供を注釈なしでじつくり追うオーソドックスな手法で、中国社会の今を旨く活写していた。グランプリをとつた「嫁の素晴らしい時代」(上海映画祭マダノリア賞受賞、国際ドラマフェスティバル海外招待作品「彼と私と両家の事情」、このタイトルのほうがいい)は、結婚という幸せ探しに全てを賭ける若い男女の婚活事情をコメディータッチで面白く見せている。

ちなみに、各国の放送事情報告の中で、中国のテレビで今一番多く作られているのが「お見合い番組」と聞いて、大いに納得したものである。

韓国の作品「おばさんたち、彼に惚れた」は、余裕を持ち始めたおばさんたちが周囲(社会、道徳の縛り)を解き放ち、日本のおばちゃん同様、スターたちを追い続ける姿を描き、「家族のペルソナ」は儒教世界の家長長制への親の側、子の側からの自省と親子関係の再構築を、やや観念的ではあつたが、確かに描いていた。こうした中、日本の作品はいわゆる格差社会の中「無縁社会」「田舎のコンビニ」「空飛ぶタイヤ」などで、弱者切り捨て、

地方切り捨て、下請けいじめ等を描いて、改めて日本の疲弊を自覚させられた。会場から、何故政府や、政治の役割を描かないのかの声も出たのは、中国大会であつた所為か、皮肉にも思えた。また、今回WOWW、読売テレビが参加し、ペイテレビの存在や、準キー局の全中の役割など、より深い日本の放送事情を印象付けられたのは収穫のひとつであろう。会議全体を顧みて、各国の議論に値する幾多の作品群がありながら、意外と議論が盛り上がりなかつたのは疑問。時間が短縮されたこともあるろう、しかしこ

では省くが、中・韓間の大会運営における行き違い等が影響したのであつたのなら、考えなければならぬ。フリーなトークを活性化することが前回大会での課題だつたはずだ。議論の少なかつた不満からか、夜間の外出が全く出来なかつた不満からか、松尾さんの部屋で連夜開かれた「松尾バー」で、松尾さんと河野さん達大先輩のご高言を拝する機会を持つたことが、私にとっては大きな幸せでありました。皆さんありがとうございます。来年は大変になりそうです。頑張ります。

### 限界集落

曾根英二著(日本経済新聞出版社) 1995円



吾の村なれば

「過疎」という言葉があらわれたのは、敗戦から二十一年たった一九六六年のこと、高度経済成長期の真っ只中だった。つまり、日本が戦後の復興から高度経済成長の道をひた走り、地方の山村や離島から若ものがつぎつぎに都会の労働力となつて流出してゆき、人口が減つてゆく状態をあらわしていた。

### 新刊紹介 第64回毎日出版文化賞

会員の曾根英二さんが毎日出版文化賞(人文・社会部門)を受賞しました。他部門では企画部門・世界文学全集=個人編集(池上夏樹)、文学・芸術部門=浅田次郎「終わらざる夏」上下、自然科学部門=木村敏「精神医学から臨床哲学へ」、特別賞=五木寛之「親鸞」上下、でした。下は毎日新聞11月3日の学芸欄記事。



そね・えいじ シャーナリ  
スト、阪南大教授。1949年生まれ。早稲田大卒。山陽放送でカイト特派員などを務めた。90年の産廃不法投棄スクープ以降の豊島報道で97年、菊池寛賞。著書に「生涯被告おっちゃん」の裁判など。

さよならナツチャン

### 武本 宏一

久しぶり歌手のペギー葉山さんがヒットを飛ばしている。

「夜明けのメロディー」。作詞・五木寛之、作曲・弦哲也。美しいバラード曲だ。

なんでも、NHKの「ラジオ深夜便」で紹介されている内にじわじわと売れ始め、遂には2万枚を突破。オリコンのランキングにも入ったという。

ラジオの深夜放送といえば、昔からヒット曲の揺り籠だった。由紀さおりの「夜明けのスキヤット」も、TBSラジオの「バック・イン・ミュージック」からヒットしたものだし、と今回はラジオ深夜番組の今昔を書こうとしたところ、シヨッキンゲンニュースがとびこんできた。ほかでもない、その「バック」木曜日担当の人気コンビだったナツチャン・チャコチャンの一人、俳優の野沢那智さんが、10月30日に肺ガンのため72歳で亡くなった、というのだ。

私には、青春時代にそのナツチャンに大いに慰められた団塊の世代のファンたちが、深い溜息をつく声が聞こえる。

ところで、実はその「バック・イン・ミュージック」の名付け親は、この私なのである。

1967年春、当時ラジオ第2制作部員だった私に、不毛地帯とも言われた深夜の時間帯を切り拓く、新ワイド生番組企画の命が下った。そして、個性ある頑固な6人のディレクターたちの、てんでんバラバラな曜日別企画を一つのまとま

った「営業用企画書」に書き上げる役目を、私は仰せつかった。

ホテルの一室で、鉛筆とウイスキーを代わる代わるなめつつ苦吟する私。ふと閃いたのが、「バック」、シエークスピア劇で、夜更けに現れ数々の悪戯をふりまいて早朝消えていく、あの妖精バックだった。

時間帯といい、まさにびつたりのキーワードではないか！これはラジオのパックなのだ！急に靈感を得た私は、一気に企画書「バック」を書き上げた。

翌朝、部長に企画書を提出し、JRN番組のネット局からの放送のため出張した私が、数日後に戻ってみると、なんと印刷された企画書には「バック」のあとに「イン・ミュージック」などと余計な文字が入っているではないか。

「何です、これはー」、猛抗議をした。「いくらスポンサーが日産とはいえ、これじゃまるで、クルマに音楽をつめこんだ、みたいな意味にとり違えられますよ」「まあ、怒るなよ」…部長は私の肩をポンポンと叩いて言った。

「これで決まったんだ。目出度し、めでたし」

ともかく番組は、その7月に、LFの「オールナイトニッポン」より3ヶ月早くスタートし、なんと15年間も続いた。

その大成功の主因は、何と言っても木曜日夜を受け持ったナツチャンの人氣以外の何ものでもない。番組終了時には、終了反対デモ行進まで、赤坂の街を練り歩いたものだ。

去年の秋、私は久しぶりに、人形町で演劇塾を開いている野沢さんを訪ね、歓談した。野沢さんは私を送るべく玄関先

に出てきて、塾の看板を見やりながら、こう言った。

「ほら、塾の頭文字を英語読みすると、P・A・C…バックでしょ」、ハハリと髪をかき分ける顔に、ちよつぱり苦笑が浮かんだ。

「ぼくは一生、バックから離れられないですよ」

ラジオの時代が、また一つ終わった。

### 短期連載

## 赤字会社走る ④

### 大類 啓

独立系映画では小林綾子主演の「ヘレンケラー」を知っていますか」もヒット。小林綾子は「おしん」の山形ロケ以来、年配者には今も抜群の人氣です。こうして映画作戦の狙いは的の中。

そうこうしているうちに映画界の老舗「松竹」が登場します。ある日、同社社員で旧知のAさんが山形にやってきました。そして

こんなやりとりがありました。「松竹さんが持つ『張込み』とか『喜びも悲しみも幾年月』とかはいくら（上映料）で出せるもんですか」。Aさん「…大類さん、実はうちで今山田洋次監督が勘三郎さんの舞台を撮ってますよ。シネマ歌舞伎っていうんだけど。「なにそれ？」

聞けば、歌舞伎の舞台公演を4×8台の映画用HDカメラで撮影し、デジタル上映する技術を開発した。山田監督は「これは新しいメディアだ」と、新作の演出を買って出た。可搬式のデジタル映写機も1セット開発し、ホール上映が出来る

という。いささか歌舞伎の心得があったのも手伝って「これだっ」と飛び付きました。

08年1月、赤字3年目。松竹とロングランの交渉の末山田洋次監督、中村勘三郎主演の「人情断 文七元結」の上映会にこぎ着けました。県内8市町を巡回し、聴入場者数は1万人超。大入りです。これには松竹もびつくり。直営のデジタル館で上映してもそんなに入らないという。県内では4市町村で農民歌舞伎がそれぞれ一座を構え、江戸中期から今日まで連続と演じられています。そんな山形の土壌がシネマ歌舞伎を下支えしたのです。

3回目の本年は、中村勘三郎主演の新作歌舞伎「野田（秀樹）版 鼠小僧」に決定。上映会は11月17日から。映画は年間数本から、シネマ歌舞伎1本に特化しました。独立系映画人には申し訳ないのですが、この1本だけで準備から終了まで5ヶ月かかり人手をそう割けないのです。

さて、本業外でもう一つの柱に据えたのはブックキング。各種団体や企業のセミナー、講演会等のゲストのあつせんです。大学祭やコンサートもターゲットです。これは意外なほど需要があります。競争相手が少ないのが幸いしました。カギを握るのはゲストをそろえる東京の会社。数社にコネを持つ局のOBを迎え、これは解決。社員からすれば本業でもあるCM制作でモデルやタレントを探す感覚を

一歩進めればすむ。本業外といっても映画同様、どこかで本業に隣接している分野への進出を原則にしたのが功を奏しました。

が、赤字脱出の決め手はやはり本業。ラストランは近い。（以下次号）

# 第23回 放送人句会

◇平成22年11月9日(水) ◇於:赤坂・麦屋

◇選者:星野高士

◇出席:伊藤雅浩、上村曉蛙、荻野慶人、豊田まつり、新村もとを、林備後、堀川とんこう、松尾馬笑、森治美、西川阿舟(11名) ◇不在投句:山県ぼん太

◇兼題:西の市、時雨、ギヤラ

【星野高士特選】

時雨来てギヤラ交渉の喫茶室 とんこう(視)  
 御大のギヤラ折り合ひて一の酉 備後(蛙、ま、馬)  
 時雨るるや猪牙船の跳ね橋くぐる もとを(◎舟、と)  
 ギヤラ入りぬ鮫鱈鍋を張り込まん 阿舟  
 ロケ先の山茶花のもとギヤラ配る 治美(慶)  
 流れよるひともあるらむ西の市 備後(◎ま、と、舟)  
 時雨るるや女系の家の薄明り とんこう(◎治、蛙、慶)

ノーギヤラを少し悔いたり懸大根 備後

【星野高士選】

そぞろゆく初ギヤラ帯に西の市 治美  
 手拍子もかそけき年の三の酉 馬笑(蛙)  
 赤テント取り払はれて一の酉 まつり(◎備、蛙、と、治)

人ごみを何度も曲る西の市 視郎(◎と、ま)

小夜時雨根岸芸者の宵化粧 暁蛙(視、も)

一葉の影つと消えし西の市 ぼん太(◎蛙、◎も、◎馬、舟)

駒下駄の襟立てて来る西の市 もとを(蛙、治)

古都にして道に迷へり初時雨 ぼん太(ま、も、備)

しぐるるや暗き灯点す山の宿 ぼん太(慶)

川端の牛と馬とに時雨かな 視郎(備)

宵しぐれ満都の酒家を降り籠める 暁蛙(も、と)

ギヤラの多寡今は他人事冬の蝶 慶人(馬、治)

時雨るゝや遣らずの雨と決めこみぬ 阿舟

おでん食ふそこばくのギヤラ懐に ぼん太(備、舟)

紅傘を振つてしぐれの別れかな 暁蛙(視)

コンビニの傘売れ残る時雨かな 馬笑(も)  
 取つばらひのギヤラ宵越さず新走 まつり(舟)  
 年の内に「おギヤラ」出るかと老女優 阿舟(視)  
 秋深しギヤラ寸借の苦き酒 馬笑  
 ギヤラ絶えてフリー侘しきボーナス期 慶人  
 ひとと居る窓硝子打ち片時雨 まつり(蛙)

【会員互選】

夕時雨シチュー鍋の火とろとろと 阿舟(◎視)  
 時雨るるや地上三十五階より 備後(視)  
 時雨きて友なき犬の肩濡らす 暁蛙(慶、と、馬、治)  
 老夫婦の手つなぎゆく西の市 とんこう(慶)  
 時雨ても野ゆく街ゆく神典かな 治美(◎慶)  
 夜咄は夢のやうなるギヤラの事 ぼん太(ま)

ギヤラゆゑに始末な生計神の留守 もとを(備)

熊手小さけれど手拍子威勢よし 阿舟(と)

古書市で触れて愛ほし時雨の記 慶人(馬)

ウインドの夢二の女初しぐれ 暁蛙(馬)

西の市揃の法被に囲まれし 治美(馬)

【選者 吟】

さくら鍋出演料は当てにせず 星野高士(舟)  
 悉く風に逆らひ西の市 (慶、ま)  
 封切らぬギヤラの薄さや西の市 (ま、も、備)  
 夕闇に重さありけり一の酉 (視、も、備、治、舟)  
 粋筋のうしろ華やぎ西の市 (治)

次回放送人句会

◇2011年1月12日(水) 18・30頃

◇於:赤坂・麦屋 (Fax 03-3586-0056)

◇兼題:破魔矢、凍蝶、社長の辞(新年或は冬の季語を入れて)

## 編集後記

▼羽田国際空港のSBJ銀行で中国の元への両替をしたが、1元114・1円だった。9月の会報の「蘇州案内」には約12円とあるので、この2ヶ月の間に元はやや高くなつた▼蘇州に到着して夕食までちよつと時間があつた、街中へ松尾氏と出かけた。会場の「蘇州会議中心」から歩いてすぐのところ、小さなラーメン屋風の店があり、覗くと壁に○○麵、××麵と列記したメニューが張り出してある。その中からねぎラーメンと思える一品とビールを注文し、勘定はラーメン2杯6元、ビール1本4元で合計10元。日本円に換算して140円である。ラーメンの味は言わぬが花だがとにかく安い。ちなみにビールは現地蘇州のもので定価3・8元、大瓶。ホテルの夕食にも、松尾バーにも同じラベルのビールが出た▼蘇州観光での同里で名所の近くの食堂に入りビールを注文すると青島啤酒が出てきた。こちらでは中瓶で1本20元。蘇州ビールの5倍である。高いと思つたが日本円に換算して280円。我慢できる値段だと思つて飲んだ▼帰途上海の浦東空港の中、中華レストランでビールの値段を聞くと68元だという。同行した訪中団の一行の多くが飲んでいたが、私はその値段は拒否した。空港の中には通路に椅子とテーブルを並べたカフェがあり、そこでは麒麟麦酒が39元。私はそこで飲んだ▼バスの窓から見るマンシヨンの大群の値段も気になつた。普通のサラリーマンが買うのは日本円で1・200〜1・500万円。サラリーマンの給料は平均3万円くらい。住宅ローンはあるが、支払いは楽ではないようで、代金の大部分を1人つ子たちは親にねだつてもらつた。マンシヨンには1億円で買つて行くものも多く、それは個人事業家が現金でぼんぼん買つて行くものだ▼僅かな体験から中国経済全体がわかるはずもないが、何か分かつた気がするのが外国旅行の面白さだろう。来年は札幌大会。サッポロビールを飲んで何が分かる人がいるかもしれない▼今号から編集後記の執筆担当は伊藤雅浩になりました。よろしくお願ひします。